叙任賞勳

○明治十六年九月廿一日
任石川縣少書記官　　從七位　　德久　恒範

時事新報

沖繩縣よりの來翰

一書呈上仕候陳ぶれば私儀は沖繩縣の一民よりして本縣は父母朋友の墨祖先墳墓の地、永年住息の家國よ候得ば事、該地の利害休戚ゐ係る者ゆるよ於ては差出ず間敷くも我等の衷情一應申述度偏に御推察奉願上候偖本縣元琉球と相唱へ候頃隣國の支那人等ハ我を指して日清兩屬の國ゐりと云ひ甚さしきハ琉球爲中國之所屬ゐど唱へれもゐ兎事共申まて實は島民の面目を辱まひるゐと少ゐらざりしゐども如何せん我等の一國ハ固ゐ絶海の孤島、人少く力乏しく唯彼の言ふおまゝゐして忍ひ居りし折柄天未ゐ琉球を見棄給はゞ手ゐ本國の大政府に假りて支那の驕傲を挫兎我等嶋民は虎狼の口を脱して慈母の手に歸したるの心地、永劫の大恩實此上もなき次第よ候然處彼自大の支那國は今以て覬覦の念を絶たず頻りゐ軍艦を作り兵備と張り清廷よて當時顯要の或人々は中國は必らず琉球を爭ふべきと迄よ口外致候との取沙汰有之我等直接の利害を感ずる者共に取ては實以て不容易次第日夜眠食すら安ん安難く恐怪痛心罷在候そも沖繩の縣地ゞ日本の版圖よるべき証跡は千百之ある中にも指當り言語の日本國よ同き風俗衣服の亦日本國に同兎は畢竟日本本陸と沖繩と開闢以來一体分身の國柄よる証據に相違なく久全島民の口碑ゐ今の沖繩人民ゞ本陸人の後裔なること紛れもゐ兎實証多兎其中にも特に分明なる者を擧れバ實國王の系統は其昔御曹子爲朝れ後裔ゐて遠くハ清和の餘派ゐること爭ふ可らざる事實よ御坐候且つは慶長の十四年島津義久幕命よて琉球を撫綏あり爾後其配下ゐ屬して三百年一日の如く日本國の保護を仰き居候處愛よ　王政御一新忝くも　聖天子親政を執らせられ明治五年九月舊國王尚泰ゐ勅諚を下され藩王の封爵を賜はり日本國の朝廷に接遇ゐて直接に天日の威光と率仰ゐ殊ゐ本島の人民台灣夷民の屠戮を受け其遺族訴ふる所ゐ兎を御憫憐ありて辱くも本國の大兵と煩はし及支那との談判を勞し率り藩王へハ大政府より種々の恩賜を給はり更よ明治十二年四月に至り恐多くも　聖天子の總召にて藩王を華族に列せられ舊主人は永く輦下に駐居して皇廷よ恐尤し率り其恩遇の厚き他の武門公家の諸公と同一の格式を以て御扱ひ有之而して全島の人民は則ち縣治の下に屬し他の諸府縣と一樣の庶政と蒙むる事と相成候右樣の御恩澤ゐの難有と細荷機喩ふるゐ物なく我等孟島の者共生て此皇澤よ逢ふ心中の喜悅是上もゐらず候實よ絶海の島嶼若し本國の庇蔭ゐ由ら ざりせゞ我等爭で天日の威光と仰視し永代聖朝の民たるを得申す可きや之を思へバ愈　聖恩の深兎を感し大政府武斷の御政略を拜するの外無御座候

然處この恩感を戴くバ傍よ爰に尚苦心と申すは前段にも開陳仕候通り今ゐ至るまで隣國支那人の擧動ゐ御座候我等獨り孤嶋よ在て對岸の支那國ゞ頻ゐ疑似の形迹を其言に發し、行ひに顯ハすと承ハり候ては我等の心細さ殊ゐ甚しく固より大政府の御保護よ對ず兎や角不足を申す儀には無御坐候得共元來敵手は無作法の支那人故今日攻めに來るやも難知、斯ては何を頼みに防き戰ハんゝ人口僅ゐ三十五万、土地狹隘四周皆海、殊ゐ積年文學と事とせし國柄なれば敵と闘ハんを武力あらず內地の兵備尚未た嚴あらずして海岸よ砲臺ゐし又軍艦を見ずなゐら垣根ゐく門戸なし兎零屋ゐ獨居して盜賊の來るゐ待つの心地、せめて海底電線の敷設ゐても候はゞ急を本國に告ぐるの便利、幾何か安心の種よ可相成候得共それさへ未た實施の場合よ至らず難堪事ゐ候斯ゐ有樣ゐ候得バ一朝支那國より沿海の測量ゐを名義よし其軍艦を以て我海口に出沒する歟但し万國の公法にも無頓着ゐる者共実然ゐ兵士を上陸致させ何等の所業に可及哉も難計塞心の至に不堪斯く申上候ては嶋民共如何ゐも臆怯の樣に思召さるべく汗顏の次第に候得共人の言を承るゐ近來の文明世界よて武力の强弱ハ全く道具仕掛けと申す事に候得バ支那人の武勇素より我日本人ゐ及ハざること遠しと申ゐゞ彼等の富有を以て軍艦銃砲の器械を自由自在に使用致し候得ば一旦の變よ成敗の程も甚た心もとゐく被存候ゐ付ては誠よ自由ゞ間敷請願ゐハ候得共大政府特別の御仁慈を以て沖繩の海港よは常ゐ三四艘の軍艦を以て非常を警衛し海岸の要害よは砲臺と設け陸上の兵備、海底の電線、本陸と氣脈と通して機を誤ることゐき樣仕度左樣相成候得ば支那人ゞ如何に我島を窺窺致居候共我等島民旦夕に危懼の憂へを免れ又彼等も是上は其肝ゞ冷やして野卑の心と絶ち旁大政府の御心配をも休兎奉ることゐ考へ罷在候從來當縣の義は政府の御厄介ゐのミ罷成り縣地の國稅地方稅迚誠に微々ゐる者にて政府の御大計上に於ても出入相償ハざる事と存候得共絶海の孤島、他諸縣の御例ゐ拘ハらず海防の御手當は即ち日本國の防禦と思召されて篤く御注意を賜ハり哀れ我等臣子とまて危懼の憂を免かれし兎島地廣番置縣の恩澤を無窮よ傳へ我大日本國の武威を率土の濱にまで浴ねからしめんこと島民一同の請願よ御座候この請願ハ我等如兎身分ゐ於て大政府へ嗷訴するの儀もゐく地方廳へ出願することゐ如何やと懊り胸中の苦心やるせゐ兎折柄幸ゐる報聘事新報御社にて早くも日支の關係を能ゞ御洞察これあり平生の御論論實に我等の頼み甲斐ゐることと存ぜ斯くは我等れ心情と申上げ且つ其餘白を假て廣く我同胞諸兄の輿論ゐも問ひ率り度、唐突の仕形ながら前文の微衷傳ゐ御憫察の上御酌取被下度紙に臨んで胸中言はんと欲する所を失ひ不盡意の所は寓々御察し被下候樣奉願上候頓首

明治十八年八月　　沖繩縣　一老生

時事新報編輯局御中

雜報

○招魂祭賜金　石川縣に於て有志者相謀り明治十年西南の役に戰沒したる者の爲よ本月廿三日招魂祭を施行する趣　啟聞ゐ達し去る廿日　恩召を以て金廿五圓下し賜はりたりと

○能久親王　戸山學校次長歩兵大佐能久親王にハ去る廿一日本職を免せられ戸山學校教頭に補せらるゝ旨仰渡されたり

○双龍勳章　伯林駐在の支那公使館附陸軍士官ナニ、チー、トンは本年の春本國に歸省し北京其他各地よ往來すると數月ゐ去て本年六月重て伯林ゐ赴兎たり其赴任の際清國皇帝より獨逸皇太子フレデリック維廉殿下に贈る所の双龍勳章を携帶せり斯くて伯林駐在支那公使李風苞ゐ之を皇太子に呈しさるゐ皇太子ハ頗る之を欣悅受領し過般大禮の節も該勳章を佩用ゐたりと清國ハ勳章を歐洲の皇太子ゞ佩用して大禮よ列し公衆ゐまで双龍勳章を知らしめたるハ清國の爲兎よ名譽ゐるは勿論同公使ゞ獨清の間ゐ周旋して外交宜しきを得たるの一斑として見るべきとおゐ

○アルベルト殿下　同殿下よハ一昨廿二日薪宮座の任官を一覽せられ又昨日は横濱へ赴き直よ領館の上獨逸公使館附の人々及我宮內外務兩省の同殿下接待掛の人々を招て午餐の饗應あり午後より獨逸公使館の招待ゐ使り同館へ赴られたり又本日は午後四時頃より再び千住小塚原の燒場ゐ至ゐ實地燒屍の有樣を一覽せらるゝよし

○夜宴　昨日永田町ゐる獨逸公使館に於て我大臣參議及各國公使等を招兎夜宴と開きたり

○檢査官派出　陸軍軍醫本部にては醫學士官生徒召集の爲兎來月上旬頃より各軍管々下へ向け生徒召集の檢査官を派出する由

○朝鮮出張　前號の紙上へ記載せし朝鮮へ出張の檜垣少書記官の一行ハ不日海軍省より胸願へ向け就航する筈ゐるに付右へ乘組出發の都合なる由尤も其期日ハ未る決定せざと云

○英國領事　横濱駐在英國領事ロッセル、ロッセルトンゼ